

# 視覚情報メディアとしての「地図」

## —「京都市山科区ガイドマップ」における 市民参加型企画・制作システムとその効果—

木 下 達 文

### 1. はじめに

2002年4月、京都市山科区役所区民部地域振興課が中心となり、山科全体を紹介する地域マップ「My やましな」が完成した。印刷された部数は約1万5千部であったが、窓口配布、郵送配布等により、そのほとんどが2ヶ月という非常に短期間で捌けてしまう結果となり、制作サイドの予想をはるかに超える反響があった。

実はこの地図、行政職員のみで企画・制作したものではなく、「やましなマップづくり委員会」という組織をつくり、企画段階から公募によって地域の住民、学生、教員等がボランティアで参画し、最終校正の段階まで行政の職員と一緒にあってつくり上げたものである。反響が大きかったということの理由として、区民が本当に使いやすい地図というものを、管理する側の立場だけでなく、実際に使う側の立場から、また異なった観点からさまざま意見やアイデアを出し合い、試行錯誤しながら両者が一丸となって課題に取り組んでいった結果であるからだと考えられる。

近年、行政事業における市民参加の流れは著しく、多くの課題を抱えながらも全国各地でさまざまな成果を上げつつある。これは根本的には多くの公共事業等に対する反省の意味が込められていると考えられるが、これまでの行政事業プロセスが市民に対して積極的に開かれてこなかったこと自体が問題なのであって、今後真に魅力ある地域づくりを考えていくためには、そこで生活する人々の参画なくしては十分な成果を出すことは困難であろうし、また市民側も責任ある提案や活動を行ってこそ、そこに新しい地域社会を生む原動力となる

う。

京都市でも、地方分権の進む社会に対応し、個性的な地域政策を推進するために市民参加は欠かせない要因として考え、平成13年に「市民参加推進計画」を策定したところである。また、この地図づくりプロジェクトは、山科区役所における市民参加型事業としては平成11～12年度に実施した「四ノ宮さくら広場」再整備事業に続く2例目の試みであり、大学と連携して行った事業としては最初のものである。そして、恐らく行政全体の地図を本格的に市民参加で手がけたものとしても国内では数少ない事例の1つと考えられる。つまり、形になったものとしてはほんの1枚のシートにすぎないが、その意義やこれからの可能性に関して考えると、この地域にとってとても大きな成果になったものと思われる。

筆者は、縁あって大学サイドから、この「やましなマップづくり委員会」のコーディネーターとして参画することになり、毎回のワークショップの開催および意見調整などの役割を担うこととなった。自己目標としては、このプロジェクトの始まる半年前の平成13年4月、京都橘女子大学文化政策学部発足と同時に、東京から山科区に移転してきたという経緯もあって、新住民としての視点における地域把握と、視覚情報メディアとしての地図の今日的意義を主として見つめると同時に、大学と市民、行政との協働といった観点からこのプロジェクトを考えることとなり、大きな経験となった。

今後、行政における市民参加型プロジェクトというのはかなり増えていくことが予想される。以下では、完成したメディアからだけでは十分伝えることのできない企画・制作のコンセプトやそのプロセスを、コーディネーターの視点から改めて検証する中で、「地図」という地域情報を伝達するメディアの意味を考えるとともに、成果物の利用状況を把握するためにできる範囲での利用者アンケートを実施し、その評価と分析を行った。半年間という極めて短期間の事業実践ではあったが、企画段階から最終段階まで行政事業に市民が関わった事例として、本稿が今後の市民参加研究や視覚情報メディア研究等の一助となることを願う次第である。

## 2. 市民参加手法による企画・制作

### (1) 地域地図制作の目的とその意義

そもそも、山科区としてなぜ地域地図をつくることになったのかという経緯について最初に触れておく必要がある。区から大学にこのプロジェクトに関する協力要請があったのが平成13年9月の下旬頃であったが、区の地域振興課内では13年度業務における基幹業務の1つとして位置づけられていた。それまで、特に他府県から山科区に転入してくる人々に対して、区全体を総合的に説明する地図が存在しておらず、少なくとも区内の基本的な公共施設や道路・交通案内をする白地図等を求める声が役所の窓口では毎日のようにあがっていた。ただ、それまでにもまったく地図が無かったわけではない。近年、比較的一般的なものとしては、京都洛東ライオンズクラブが山科の史跡等を紹介するために制作したA3 1枚モノの地域地図「史跡案内マップ」が存在していたため、窓口で地図の要請があれば主にこの資料を新規住民に対して渡していたようである。しかし、この地図は区役所が制作したものではないため、史跡情報を網羅しているという点においては非常に利用価値は高いが、道路標示が大まかであり、かつ公共施設等も客観的に掲載されているものではなかったため、利用者の要求を十分に満たすものではなかった。このような状況から、今回の地域地図制作企画が決定され、しかもより利用者の視点に沿った便利な地図をということで、市民参加型のプロジェクトへと展開していったのである。

前章で述べたように、筆者は平成13年の4月に東京から山科区へ転入してきた1人であり、行政が発行する地域地図が存在しないことについては、実は正直非常に不便を感じていた。なぜなら、はじめて来た土地で住所のみを頼りに目的地に行こうとしても、町名のない地図ではほとんど意味をなさないからである。したがって、民間の発行する道路地図などでもかなり細かく描かれたものを購入するか、あるいは図書館等に備えられている住宅地図を丹念に調べるという方法を取らざるを得なかった。京都の町は、山科区も含めて第2次世界大戦中に空襲の被害をほとんど受けていないため、道幅が狭く、場所によって

は行き止まりの道も沢山あるのは周知のとおりである。加えて山科地域は、高度成長期以前は農業を中心とした土地であり、農道をそのまま現在の車道として利用している部分も多数存在しているため、いわゆる平安京のような碁盤の目構造の街並みにはなっておらず、土地を構造的に把握しづらいという特色を持っている。このような意味からも、比較的详细な地理を頭に入れておかないと、道に迷うのは当然のこと、袋小路に入ったらなかなか出られなくなることが十分考え得るし、また、これまで多くの新住民の方たちがさまざまな失敗の繰り返して車道や地理を覚えていったであろうことが容易に予想されるのである。

今回、こうしたプロジェクトが山科区の試みとして展開されるということは、新住民のみならず、長く住んでいる人々にとっても地域を再認識する機会として非常に意義のあることと考えられた。一方、時を同じくして京都橘女子大学としても文化政策研究センターの研究プロジェクトとして、「山科文化開発プロジェクト」が平成13年度始めより始動し、より地域との接点を持ちながら実践的な研究を行うことを目指していた。そのため、「やましなマップづくり委員会」への協力は、山科文化開発プロジェクトの一部として位置づけられることとなり、大学が地域へより開かれた存在になっていくための足がかりとしても重要な意味を持っていた。そして、大学が立地する土地の地図を制作し学生に配布することは、すなわちこの土地を学生により深く理解してもらうことにつながると考えられる。たとえば、筆者が担当した平成14年度2回生の授業である文化政策事例研究では、まさに山科地域の文化施設や活動を研究対象としたため、演習ツールとしての活用が可能となった。後にも述べるが、実は大学だけでなく、平成14年度から総合学習がスタートしたことに関連してか、区内の小・中学校から「総合学習の教材として山科区ガイドマップを活用したい」という問い合わせが区役所にあった。残念ながら部数が限られていたため、生徒全員に配布というところまでの要請には十分答えることができなかったが、このことは企画・制作に参加した1人としては大変嬉しい反応の1つであった。

## (2) 企画・制作プロセス

### ○「地図」とは ― 与件の整理 ―

つぎに、ではどのようにしてプロジェクトが動いていったのかを整理しておきたい。最初の段階では、まず与件の整理から始まった。そもそも、一番最初に地図をつくろうという意志はあっても、明確な完成イメージがあったわけではない。しかしながら、時間と予算は、限られていたため、区役所としての最低目標を明確化することにした。その作業に際して最初に手がけたことは、他の行政体がどのような地図を制作しているのかその事例をできるだけ多く集め、最低限の情報と完成イメージサンプルを考えることであった。プロジェクトを開始したのが10月、完成目標は3月であったから、企画・制作に要する期間は約半年。印刷期間を除くと実質5ヶ月ほどの間に市民参加ボランティアの募集から企画の構築、内容の検討をしていく必要があったため、非常に迅速な対応が必要であった。まず、区役所と大学の共同作業で約100件程の地図情報を2週間ほどの間に集め、より理想的なイメージに近いタイプの地図を元にした概算の再確認と、最低限必要な情報を洗い出すこととした。他都市の事例として主に参考としたのは、「神戸市兵庫区」「大阪市西区」「奈良県大和郡山市」「滋賀県草津市」「東京都練馬区」「東京都江戸川区」「東京都小平市」等の地図であり、これら収集した資料は、現在、山科区区民部地域振興課および京都橘女子大学木下研究室に保管されている。最終的に区の与件として必要なものを以下の2つに絞り込み、この条件を満たしつつ、それ以外の情報については参加者のアイデアを自由に盛り込むという形式をとることとした。

ア) 山科区の主要な公共施設の位置を掲載した全図を作成する

イ) 自由な発想によるイラストマップを作成する

また、判型については行政地図に多く見られるA1を八つ折り形式にし、印刷は両面フルカラー仕様にするということについても内部的なコンセンサスを得た。

一言で「地図」といっても、そこにはさまざまな形式や様式がある。1つとして同じものはない。行政の地図としては、当然「市域の構造的把握としての全図」および「公共施設等の位置とアクセス情報」は不可欠といえる。ただし、

2 番目の「イラストマップ」については、単なる全図という固い情報のみでは市民の意見も十分反映できないであろうし、無機質な地図に「より感情を与えていく意味で必要なもの」とスタッフは考えたのである。加えて、そのイラストマップから「地域資源の把握」に繋がるようなものと、「地域に愛着が持てるための仕掛け」をつくりたいと個人的には考えていた。つまり、それは地図が単に位置を把握するメディアとして止まるのではなく、地域におけるさまざまな資源を知ると同時に、その町の歴史や文化に愛着がもてるきっかけとし、そこからこの地域ならではのまちづくりへと繋がるようなメディアとしての可能性を追求したいと考え、常にこのことを念頭に置きつつプロジェクトに参加した。

#### ○属性バランスの考え方 ― 組織の策定 ―

初期段階で比較的労力を要し、かなり配慮を行ったのが組織づくりであった。プロジェクト推進にあたっては、市民、学生、行政、教員からなる組織をつくらせて運営することは当初から決まっていたため、運営は「委員会」方式をとることとなった。市民については、行政の発行する「市民しんぶん山科区版」（平成13年10月15日発行）によって広く区民に呼びかけることによって希望者を集めることとし、学生については、筆者が京都橘女子大学の学生に個別に調整することで参加者を募るという方法をとった。

市民しんぶんの応募締め切り日である10月26日までにエントリーされたのは2名であった。兩人とも区内在住年数が比較的長く、60歳以上の男性であり属性的には似かよってはいたが、それぞれ個性的で、このプロジェクトに対する思い入れは大変大きなものを感じた。その後、遅れてもう一人同じ属性の方が参画され、公募による参加者は全員で3名となった。

一方、大学の方では後期授業が開始され、学生自身も勉学やサークル、そして文化祭を控えかなり慌ただしい状況の中で、最初は掲示による公募を行ったが、参加希望者は現れなかった。そこで、個別に大学事務局に相談しつつ、最終的に区内に実家がある学生と、区内に下宿している学生の計2名に直接交渉し、プロジェクトに参加してもらうこととなった。

それでも、市民しんぶんによる参加者と学生との間に年齢的な開きがかかり

あったということ、また市民しんぶんで応募された方の中には新住民の人がいなかったことから、企画段階での意見の偏りが想定できたため、さらに参加者を募ることとした。具体的には、年齢的に30代から50代で、しかもできれば他地域から山科区を客観的に見られる人を数人プラスする必要があるあった。最終的に行政側の調整で以前市民参加プロジェクトを経験している30代の女性1名と、大学側の調整で区内に在勤している30代女性1名が加わることとなった。また、行政側のスタッフは、50代男性、20代女性、20代男性(全員区外在住)、そして大学教員としては筆者が30代男性(新住民)であるから、委員会の構成メンバーは計11名となり、属性バランスは十分とはいえないが幾分幅広い年齢層を設定することができたのではないかと考えている。全員ボランティア参加であったのにも関わらず、ほとんどの参加者が毎回出席したため、人数的にも適度であったと考えられる。そして、これらのメンバーに加えて、イラスト等デザイン全般を担当するデザイナーの方も委員会に参加していただけることとなった。彼女からはデザイン制作の視点から説得力のある貴重な意見を伺うことができ、制作実務担当者が委員会に参加していることの重要性を改めて認識することとなった。つまり、そのことが今回の事例ではプロジェクトのスムーズな進行および質の向上等に寄与する効果を得たと考えられたからである。

なお、委員会の節目等には、山科区長、区民部長、地域振興課長の挨拶ならびに委員会への参加が得られ、貴重な意見をいただくこととなった。

#### ○フラットで自由な環境の創出 —— 委員会の運営 ——

10月中は、委員会開催準備のための組織構築と資料収集等を行ったため、第1回目の委員会が開催されたのは11月に入ってからであった。形式としては毎回「ワークショップ」と称してかなり手足を動かしながら企画・制作するという状況を想定していたが、公募参加の方が皆60歳以上ということもあり、実際には通常の会議に極力ワークショップ形式の討論を加えた方法で進められた。委員会の時間は2時間を設定したが、結果的に2時間を超えることが多く、強引にまとめざるを得ない状況もあったため、テーマによっては事前調整を周到にしておく必要を感じた。日中に予定が入っているメンバーが多かったため、金曜日の夕方を委員会の定例とした。場所は山科区役所内の会議室を利用する

こととなった。山科区役所は地下鉄の駅に近く、区内のほぼ中心に位置するため利便性が良く、メンバーが集まるには非常に適した場所であった。

計画段階では、月に2度ほど委員会を開催するという予定であったが、第1回目を終了した時点で、想像以上に調整事項の多いことが判明し、その後はほぼ毎週のペースで委員会を開催せざるを得ない状況となった。区民委員は全員ボランティア参加であったため、当初多くの欠席が予想されたが、メンバーの参加意識は非常に高く、ほとんど欠席者が出ることなく会議が進められた。また、幾分和やかな雰囲気を出すために、会議ではお茶やお菓子が出された。

基本的には、コーディネーターが委員会全体の司会進行・意見調整を行い、行政委員はプログラムの作成、議事録の作成、関連資料の作成等事務局的役割を担当した。区民委員にはできるだけ実務作業をすることなく、自由な発想でアイデアを出してもらうことにした。また、行政委員や筆者自身もヒエラルキーをつくることなく自由な立場から意見をできるだけ出すよう心がけた。逆に区民委員には、地図作成に必要な地域情報カードの作成や、主要なランドマークを見つける作業に関しては、事務局だけに全てを任せるのではなく、可能な範囲で自主的に協力してもらうこととした。

地図を制作するにあたっては、実際にタウンウォッチングを行い、地域観察をする機会を数度持つ予定であった。ところが、企画が固まったのが12月初旬ということもあり、実際にタウンウォッチングを開催できたのは結局1回のみであった。

毎回のワークショップは以下のように開催され、延べ40時間近くに及んだ。

- |     |        |                       |
|-----|--------|-----------------------|
| 第1回 | 11月9日  | 載せたい情報について各委員から意見     |
| 第2回 | 11月16日 | 紙面の全体構成検討             |
| 第3回 | 11月19日 | 各マップのテーマ検討            |
| 第4回 | 11月30日 | 各マップの題材および内容検討        |
| 第5回 | 12月7日  | イラストマップの構成および題材検討     |
| 第6回 | 12月14日 | タウンウォッチング(義士まつり/安朱周辺) |
| 第7回 | 12月21日 | 地図基礎資料のまとめ            |
| 第8回 | 1月18日  | ラフスケッチおよび原稿文の検討       |
| 第9回 | 1月25日  | マップ吹き出しおよび表紙写真の検討     |



- |      |       |               |
|------|-------|---------------|
| 第10回 | 2月8日  | 表紙写真およびタイトル決定 |
| 第11回 | 3月18日 | 版下案の構成        |
| 第12回 | 4月23日 | 完成お披露目／反省会    |

(3) テーマ別内容と成果物の特色 ―― 思索プロセスとその成果 ――

○全体の構成

企画段階では時間的な制約もあって、約1ヶ月で大まかな構成とラフレイアウトを作成する必要があった。そのため、第1回目のワークショップでは他都市のさまざまな事例を検討するとともに、各委員の持つイメージを摺り合わせる作業を可能な限り行い、第2回目開催までに意見を集約し、事務局案としてミニチュア版のラフ地図の制作が行われた。これは、各委員の頭の中にほぼ完成されたイメージを確認し合う上で非常に効果的であったと考えられ、またこのラフ地図を叩き台として、さらなるイメージ調整を短期間で行う上でも効果的なツールとなった。その後も、原則的にはこの基本プランを大きく変更することなく、細部の調整に入っていった。内容的な特徴として、まず行政範囲としての山科地域に生活圏としての醍醐地域をプラスしたことである。行政区分を明確にしておくことで、利用者の利便性を図ることとした。また、さまざまな情報を載せる提案があったが、紙面に限りがあるため、他にすでにどこかに存在が確認されている地図情報やデータ等などについては、関連情報としてホームページアドレスなどのリンク先や電話番号情報を極力付記することによって、必要な情報を削ぎ落としていくこと作業を行い、この地図からさらに外に広がっていく拠点となるような位置づけを行った。さらには、部分的コピー使用を想定し、原則的にはA4サイズを単位として全体構成を行っている。これは、カッティングして持ち歩くことや壁に貼ることもなども可能としている。

さまざまな思考の後、最終的にはA1の紙面に以下の5つの地図を構成した。まず、「イラストマップ」と「公共施設等案内地図」が約A2版の大きさに両面の中央に入り、テーママップとして「交通安全マップ」「子育て支援マップ」「高齢者生活支援マップ」がA4版でサイドに散りばめられることとなった。また、施設情報リスト、山科区の概要、町名の読み方、奥付などをひとまとめにした(図1及び図2)。次には、個別の内容について触れておきたい。

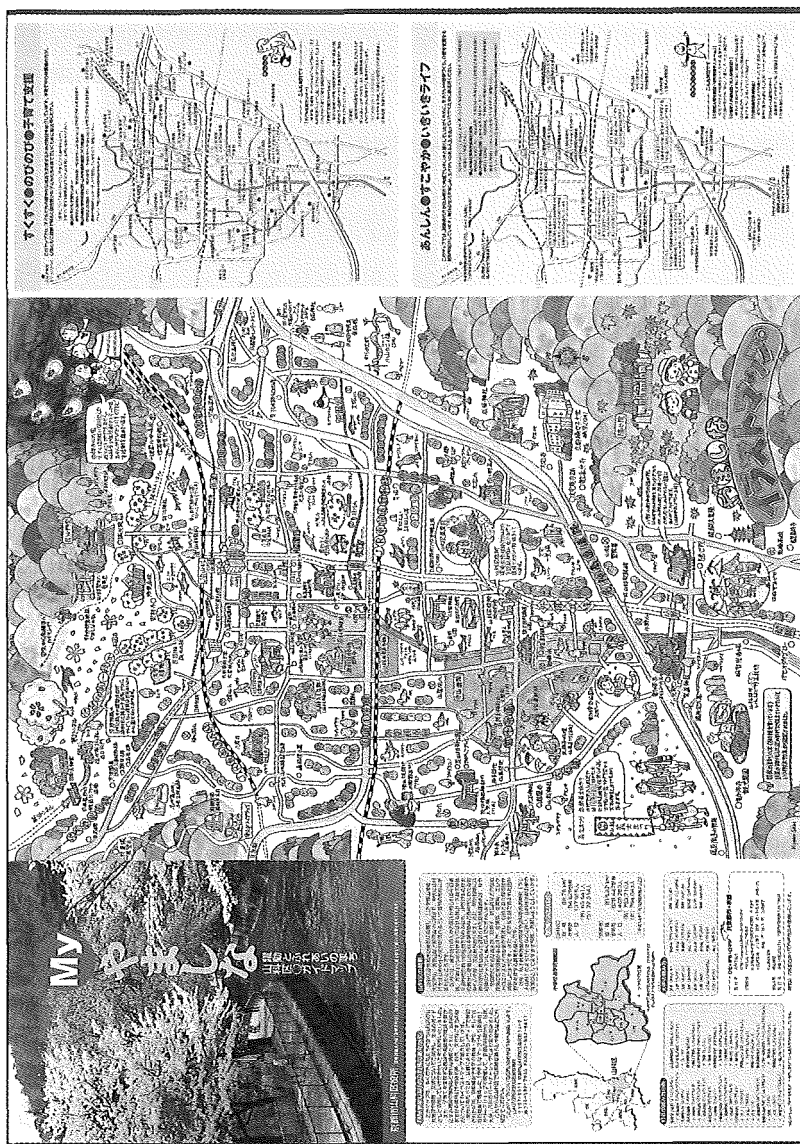


図1 「My やましな」1面

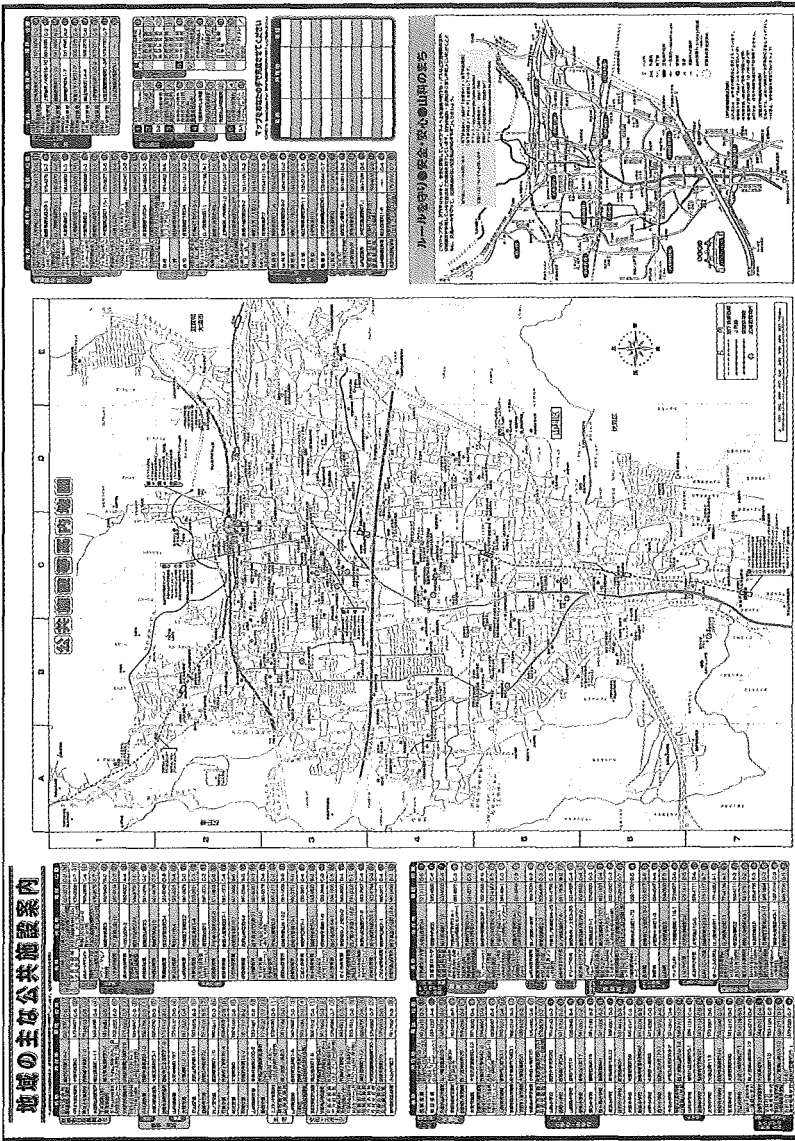


図2 「Myやましな」2面

## ○テーママップ

新住民の人が利用しやすいという点で多く意見が出たのが、「テーマ性のある地図づくり」であった。つまり、白地図の中に全ての情報を詰め込むというこれまでの行政地図では、目的の情報をなかなか探し出しにくいという欠点があり、テーマ別に整理した地図を別に設けることによって利用者がより早く情報を得られるようにするための工夫が考えられている。テーマ候補としては沢山あったが、紙面の関係で物理的に制約せざるを得ず、最終的に重要度の高い「交通安全」「子育て支援」「高齢者生活支援」の3つに絞られた。それ以外には、「学校」「病院」「歴史・文化」「スポーツ・レクリエーション」などのテーマが提案されていたが、各々のテーママップやイラストマップ、公共施設案内地図に情報を分散することとした。その他、意見の中には、A4 ファイルにテーマ毎のシートをつくってまとめるというアイデアや、マスターシートにテーマ毎のクリアシートを作成するなどのアイデアも出たが、他の地図との関係や予算面の関係で実現化しなかった。なお、このテーママップに関して言えば、近い将来、コンピュータが各家庭やモバイルという形で普及していった時に、「紙」という媒体ではなく、インターネット地図情報として、目的別地図等を作成したり、そこから施設情報にリンクしたりという「電子情報」としての使い方も可能となろう。

### ●交通安全マップ

より安全に区内を移動してもらうための地図として発想された。幹線道路情報では単に道路の正式名称だけでなく、俗称としての「三条通」「五条通」などの道路名も記載し新住民への配慮を行っている。また、地下鉄やバスなどの交通機関情報の他、特記すべき内容としてここでは思い切って交通事故が多発している交差点情報などを警察署の協力の下に調査し、掲載した。この地図では全体として「人が安全にアクセスできるための情報を提供する」というコンセプトを貫いており、「自動車」ではなく、あくまで「人」を中心とした交通マップとなることを狙って企画・制作を行った。

### ●子育て支援マップ

山科区は比較的若い世代の居住割合が高く、そうした世代の多くは核家族による子育てを行っている。そこで、「子ども支援センター」や「子育て支援ス

ーション」をはじめ、「保育所」「保育園」「幼稚園」「児童館」「子どもの遊び場」等をひとまとめにするとともに、休日急病内科・小児科診療所に限り掲載を行った。

#### ・高齢者生活支援マップ

今後、日本は高齢化社会が一層進むことが予想されている。生涯山科区でいきいきと安心して生活していただけるよう、老人福祉関連情報をテーママップに掲載することとした。内容としては「介護老人福祉施設(特別養護老人ホーム)」「介護老人保健施設(老人保健施設)」「介護療養型医療施設」「シルバー人材センター」等の情報を掲載し、必要に応じてコメントを付した。

#### ○イラストマップ

平面的な地図だけでは、地域そのものに魅力を感じるというのはなかなか難しい。今回のプロジェクトの大きなコンセプトの一つに、「見て楽しい地図」「見てホッとする地図」「見て動き出したくなる地図」という意見があり、それを表現するのがイラストマップであり、各委員の力の入った部分でもあった。

このイラストマップに何を表現するのかという議論では、「山科の魅力」ということとなった。ではどのように魅力を抽出するかという検討会の中で、町内会の上部組織である各学区自治連合会の会長に、それぞれの地域における魅力ベスト3を選定していただき、一般的な自然・歴史情報等も客観的に考える中でリスト化し、デザイナーの意見を聞きながら、表現可能な範囲で最終的に委員会内で選定を行った。全体的には四隅に四季が感じられるモチーフを置き、文化歳時記が感じられるようイベントがある月を記載した。野鳥や魚などの表示については、日本野鳥の会および京淀川漁業協同組合から情報をいただくなど、その根拠を明確にしている。また、京都市では各区毎に「区民の誇りの木」が平成12年度に選定されており、地域の自然に親しむという意味で、それらの樹木も可能な限り記載することにした。なお、必要に応じて吹き出しを付けたが、校正の段階で地図が見づらくなることがわかり、最終的には吹き出し数を「16」から「6」に減らし、文字数も可能な限り少なくしている。

一見このイラストマップは、観光地図のようにも見受けられるが、当初から「観光地図をつくるのではなく、生活者が地域に愛着が持てるような地図づく

り」を目指しており、あくまでその結果となっていることを改めて記しておきたい。

#### ○公共施設等案内地図と公共施設データ

想像以上に時間を要したのがこの公共施設案内地図である。というのも、下敷きとなるよい地図がなかなか見つからず、最終的には「都市計画地図」を台紙としてトレースを行い、地下鉄路線など近年大きく変更があった部分を書き換えることにより白地図を作成した。そして、その白地図に施設情報等をプロットしていったのである。

公共施設情報はリストアップの段階ではリクエストが多く、最大736件となった。病院やコンビニエンスストア・大型スーパーなど民間の情報も掲載したいとの意見もあったが、行政マップに民間施設を掲載する目的を考える中で、病院は救急病院と総合病院に限り、コンビニエンスストアや大型スーパーはその定義・規模を明確化するとともに、公平性という観点から単に大規模施設や特定の販売店のみを選定するのではなく、公共地図というメディアにおける空間把握の手段という意味で、「ランドマーク(目印)」としての掲載の可能性を追求した。その後、委員による主要交差点でのランドマーク情報調査なども実施したが、最終的にプロットINGの段階でかえって紙面が見づらくなることが判明したため、掲載を行わないこととした。なお、ランドマーク調査中に、対象施設が取り壊されたり、新たな施設が建設されたりするなど、民間施設の掲載については絶えず地図を更新していくシステムをもたないと、かえってランドマークとしての機能を失いかねない状況が危惧されよう。

その後、全体の情報量を絞り込むために、情報の重要度により以下のランク分けを行った。

ア)「Aランク」は、地図に固有名詞を記載し、一覧表に名称・住所・連絡先リストを掲載するもの。

イ)「Bランク」は地図に固有名詞のみを記載するもの。

なお、印刷した段階で地図が完成したということではなく、利用者の目的によって地図を完成してもらおうというアイデアで、公共施設データの最後に自由記述欄を設けている。

## ○表紙

表紙については、写真1枚モノで表現することが割合すんなりと決定したが、表紙のモチーフを何にするかについてはかなり意見が分かれた。そこで、ワークショップでは、まず「山科」をイメージするモチーフの抽出からはじめ、その後テーマとして具体的なイメージ提案されたのが「航空写真」「山科の自然」「歴史遺産」「環境」といったものであった。ところが、スケジュー尔的にも予算的にも新たに撮影を行うということができないことが判明し、手持ちの写真で決定せざるを得なかったが、表紙に耐えられる写真が思うほど集まらず、非常に限られた選択肢の中で、しかも少し古い写真を使わざるを得なかった。表紙写真候補として「琵琶湖疏水の桜」「勸修寺の睡蓮」「こども義士」の3つが絞り込まれ、多数決で琵琶湖疏水に決定した。

表紙タイトルについては、各委員から少なくとも1つネーミングアイデアを出してもらい、全員の投票により決定するという方法をとった。委員会ではひとつに決め込まず、「MY やましな」と「こんにちは！山科」の2案に絞り込んだ段階で、表紙写真とのレイアウト等の兼ね合いで最終的な選定はデザイナーにお願いした。

## ○奥付その他

当初レイアウトでは奥付頁を予定していなかったが、「利用情報」「山科区の概要」「学区域略図」「町名の読み方」「奥付」など必要情報をまとめる頁の必要性から、地図を折り込んだ状態で表紙の裏側になる頁を奥付頁に当てることとなった。この頁には交通安全マップを配置することとなっていたので、公共施設データ欄を1頁絞り込み、交通安全マップはそこに移動することとした。

そして、行政側の配慮で、奥付にはマップづくり委員会のメンバー全員の氏名を記載することとなったが、これは地図が単なる印刷物に止まらず、本と同じように著作物としてこれだけの人々が関わった成果という意味合いを示す表現として、またボランティア活動に対するお礼の意味でも非常に大切だと感じている。

### 3. プロジェクトおよび成果物の評価

#### (1) 内部評価 ― 委員による活動および成果評価 ―

平成14年の4月に地図の印刷が完了し、最終の委員会において成果物のお披露目と反省の会を行った。以下には、その時出された内部メンバーによるこのプロジェクトの評価内容を紹介するとともに、筆者なりのコメントを付した。

##### ○委員会活動に関して

##### ●スケジューリングについて

基本的には月2回程度の開催を予定していたが、企画作業内容と期日の関係で毎週開催せざるを得ない状況となり、「ハードであった」という意見があった。これは当初計画の段階でもう少し工程的にゆとりをもっておく必要があったと思われると同時に、参加者の意識の高さに支えられたからこそ、委員会がスムーズに運営できたと考えられる。

##### ●現地調査について

運営企画の段階では、タウンウォッチングを何度か実施する計画であったが、季節的な関係や作業内容との関係で、最終的に平成13年12月14日の1度のみの開催に終わった。委員からは「タウンウォッチングをもっとやりたかった」「机上の作業が多かった」という意見があり、これもタイトなスケジューリングからきていると考えられ、工程の考え方については大きな反省材料となった。

##### ●今後の活動について

地図という性格上、できれば2年に1度程度の改訂が望まれ、プロジェクトの継続を望む声があった。またその際、できれば同じデザイナーにお願いし、今回参加したメンバーの中にも、次回も参加したい旨希望する者があった。行政内における予算上の考え方もあろうが、今後節目の時期で改訂や変更は当然することとなろうが、こうした意見を反映されることが望まれる。

##### ●アンケートの実施について

今回のプロジェクトではさまざまな立場の11名という数の人間が、新住民に



対してどのような地図をつくったらよいか十分知恵を出し合って企画・制作を行ったのであるが、やはりその成果に対して「利用者がこの地図に対してどのように感じたかを聞いてみたい」という声が上がリ、「アンケートを実施してみてもは」という意見が出た。アンケート調査に関しては、プロジェクト実施中から筆者も研究の一環として外部評価を客観的に押さえておきたいという思いから実施内容を考えていたこともあり、成果物を配布する段階で実行することとなった。詳細については、次の外部評価の項を参照されたい。

#### ○成果物に関して

##### ●表紙について

表紙の写真は、委員の多数決により「琵琶湖疏水の桜」に決定されたが、その時点ではポジフィルムの状態であり、最終の色校正は時間的な関係で事務局に一任することとなった。完成状態では、満開の桜やそれを鑑賞する人の情景がほのほのとした雰囲気醸し出しているが、思いのほか影の部分が多く、全体的に「思ったより暗い」という印象を指摘する声があがった。また、フィルム自体も少し古い写真を使ったため、現在では改修されている疏水の柵に違和感があるなど、「将来改訂する際には新しい写真を使ってほしい」といった意見も出された。

##### ●紙質について

地図の大きさがA1であり、八つに折り込んでいるため、当然広げることとなるわけであるが、その際「紙質がなんとなく破れ易い気がする」「紙の表面がツルツルしすぎているおり見にくいので、マット系の紙が良かった」という声があがった。確かに、地図というのはかなり長い期間使用するとともに、持ち歩いたりすることも考えあわせるとかなり丈夫な素材が望まれる。仕上がりとともに、素材に対しても時間が許せば選定の機会を設ける必要性があったと考えらる。また、一方でマネジメント的には、当然ながら素材の選定はそのまま予算に反映されるため、予算的裏付けも十分考慮する必要がある。

##### ●公共施設等案内地図について

行政の発行する地図であるから、当然ながら公共施設を中心に掲載するものであるが、「住民がよく利用する大型スーパーなどの表示が欲しかった」「山科

にある有名企業を入れたかった(広告料をもらうことも視野に入れて)」など民間施設の記載を望む声が改めて起こった。企画段階で十分な議論を行ってきたと思われたが、民間施設の掲載基準(面積、規模、業種など)を厳密に行わない限り不公平が生じてしまうことなどがあるため、慎重になる必要がある。また、大型スーパーに関しては他の小売り施設に較べて視認性が高く、行政地図にわざわざ入れる必要はないと個人的には考えるが、スーパーに限らず先の「ランドマーク」としての考え方は紙面に余裕があれば活かしてみたかったと考えている。なお、民間施設に関して言及するならば、行政がそうした地図を作製するのではなく、今後観光協会や地域の商店街等の団体が個別の地図づくりを行うことによって、広く住民に対して紹介していく活動等がなされることが期待される。

- 公共施設案内リストについて

施設情報についてはランク付けをし、リスト化を行った。見やすさを考慮して項目別に色分けを行ったのであるが、「色分けが分かりづらい」という意見があった。というのも、項目数が全部で「12」もあったため、12色違ったカラーを設定してはいるものの、青と緑、黄色と橙など、微妙に色合いが分かりづらい所があるのも事実である。時間的な関係で委員による色校正ができなかったことが要因として考えられるが、もう一歩進んで視覚障害者による色校正作業をする機会を個人的には持ちたかった。つまり、色のバリアフリーといった概念が、今後こうした公共出版物には必要なものであると感じた次第である。

今ひとつ、施設情報に関連して、「開館時間、休館日、駐車場情報など、より詳細な情報が付記されているとよかった」との意見が出された。確かに情報は多くあった方が利用者にとっては便利な点もあるだろうが、情報が多すぎることによってかえって紙面全体の文字ポイントが小さくなり見にくくなったり、情報面積が地図面積を上回ることも十分考えられる。施設情報の中では、Aランクの施設に対しては電話番号を明記し、逆に細かい情報は省くことにした。将来、各施設にホームページが完備されれば、リンク先としてそうしたアドレスを記載することは考えられようし、テーママップではホームページのあるものに関しては極力リンク先を明記した。

- イラストマップについて

ラフデザインの段階では、余白部分が多くなるのではという心配があったが、その後デザイナーによる書き込みが加えられたことと、鮮やかな色彩を施されたことによって、全体の中でもこの部分がかなり華やかな印象を持つこととなった。ほとんどの委員がプラス評価をする中で、一部「文字量の多さ」「随心院の表記」「写真の挿入」について意見が出された。文字量については先にも述べたように、かなり削り落としたわけであるが、それでもかなり窮屈な印象を与えるのも事実であり、イラストと文字の関係については今後の課題となろう。また、随心院については、位置を示すイラストと、秋のイメージとして右下の隅にも表現したため、「地図を見る人によっては誤解の原因になる恐れがある」との指摘があった。そして、「イラストばかりなので施設に関する写真もいくつかあった方が具体的なイメージができた」という意見を聞いて、改めて写真の使い方について考えをめぐらすこととなった。

• テーママップについて

テーママップに関しては、「字が少し見にくい」「紙面にゆとりがあればもう1つくらいテーママップがあってもよかった」という意見が出された。字の見にくさに関しては、下地の地図に対して文字情報の量が少し多いのかも知れない。また、テーマ毎の地図については、本来もっとたくさんのテーマがあるわけであり、それを1枚に納めること自体に無理があるわけで、今後ホームページなどと組み合わせてテーママップが複合的にリンクしあうものがつくれるのであれば、これからの新しい地図となっていくと考えている。

• 判型について

与件を整理する段階から、折り込んだ状態でA4とすることが決定していた。これは他の行政地図の多くがA4の大きさであったことから、当然の発想としてスタートしたのであるが、「持ち歩くには大きい」「折り方を〈三浦折り〉にすると携帯に便利」「持ち歩き用の小型版を今後つくってはどうか」などの意見が出てきたことから、完成してから〈大きさ〉という根本的な課題を再認識することとなった。家に置いておいたり、壁に貼っておくにはこの判型でも問題は感じないであろうし、切り離して利用することも考慮して紙面レイアウトを行った。しかし、持ち歩くことを十分考えたかという点、そうではなく、この点に関しては大きな宿題を残す結果となった。

- その他

最終段階では事務局を中心として再三校正が行われたのにも関わらず、表記の上で細かな点ではあるが不適当な箇所が若干発見された。今後、施設情報なども時とともに当然変わっていくため、情報改訂のシステム構築が望まれる。

## (2) 外部評価

地図の配布と同時に、成果物の外部(利用者)評価を目的として、木下研究室が中心となってアンケートによる調査を可能な範囲で実施した。アンケートは、主に山科区役所の窓口で地図を求めに来た人を対象としたものと、京都橘女子大学の学生を対象としたものの2系統の調査を行った。アンケート内容は、「性別」「年齢層」「山科区との関わり」「地図の印象」を聞く比較的簡素な内容にし、その他自由記述欄を付した。区役所、大学共に同じ情報内容とした。なお、大学内でも実施することとしたのは、区役所での回答者に新住民の割合が少ないであろうと予測したためである。以下に、その調査方法とその結果を示したい。

○一般評価 ―― 主に山科区役所に訪れた利用者による成果評価 ――

- 調査方法

アンケートは官製葉書を使用した。原則的には山科区役所において地図配布時にアンケートも一緒に手渡し、後日利用者が記入し投函してもらう方法をとった。ただし、区役所に電話連絡にて地図を郵送希望をする人に対してもアンケートの同封を行った。調査期間としては、区役所にて地図の一般配布が開始された、平成14年4月26日からアンケート配布をスタートし、回収については平成14年9月2日付けの消印が入った葉書まで有効とした。なお、印象評価欄が未記入のアンケートについては無効とした。

- 調査結果

### [回収率]

アンケートの配布は500行い、返送件数が116(有効回答件数115)であった。アンケート総数に対する有効回答件数の割合は23%であり、かなり低い回答率であった。

[男女比]

男性が54に対して、女性が61であり、男女比の比率はほぼ半々の割合であった。

[年齢構成]

まず男性の年齢構成であるが、20歳未満が0、20歳以上30歳未満も0、30歳以上40歳未満が10、40歳以上50歳未満が4、50歳以上60歳未満が4、60歳以上が36であった。60歳以上が36と全体の6割以上を占め、また30代が全体の約2割を占めており、構成的に20代以下と、40代50代の回答率が非常に低い結果となっている。

一方女性の年齢構成は、20歳未満が0、20歳以上30歳未満が5、30歳以上40歳未満が8、40歳以上50歳未満が10、50歳以上60歳未満が22、60歳以上が16であった。50歳以上が38と全体の6割以上を占めており、男性ほどではないが、こちらでも高い年齢層からの回答が大部分を占めた。

[区内在住年数]

年数の低い順に、3年未満が18、5年以上10年未満が5、10年以上30年未満が28、30年以上50年未満が41、50年以上が7、その他(区外在住者、区内在勤〈学〉者など)が16となっている。3年未満の回答が全体の約15%、5年以上10年未満の回答数を加えてた割合は20%となっている。一方、10年以上在住している人の総数は全体の66%であった。回答者の多くは、山科区内に長く在住している人の割合が高く、本来、成果地図の利用対象となる新たに転入してきた人の割合が低いという結果となっている。

[印象評価・自由記述]

地図を見た印象に関して、「良い」「まあ良い」「あまり良くない」「悪い」という4段階の評価設定を行った。その結果、「良い」と回答した人が86で全体の約75%であり、「まあ良い」と回答した26を加えると全体の97%となっており、今回の地図が高く評価されていることを伺い知ることができる。また、「あまり良くない」と回答した人が3で全体の約3%となっており、「悪い」と回答した人はいなかった。属性に関わらず平均してプラス評価がなされている。

また、「あまり良くない」とマイナス評価をした3件の理由として、「もうすこし拡大してほしい」「お店情報を記載した地図を期待していた」「将来のまち

づくりに繋がるような地図が欲しかった」という意見がなされており、視覚的な課題、民間施設表記、地図の広がりを求めるものであった。視覚的課題と民間施設表記については内部評価課題としても取り上げられた事項であったのは前述の通りである。ただ、地図の広がりについては、委員会内部では十分な意見交換がなされたとは言えず、貴重な意見であり真摯に受け止める必要があると感じると同時に、これまでの作業内容から考えると、とても半年間でそのような地図をつくり上げるのは大変困難であることが予想される。今後、願わくば今回の成果を元に、コミュニティ単位等で「コミュニティマップ」などを制作する動きが出てくることを望む次第である。

次に、評価理由および自由記述に関して、上記以外の内容を簡単に整理しておきたい。なお、自由記述については表現が多様であったため、正確な数値に置き換えにくかったため、その概要を以下に示すこととした。

まず、全体的なプラス評価としては、「全体的にわかりやすい」「いろいろな視点があって良い」といった視認性や企画内容に対する意見が大部分を占め、マイナス評価では「持ち運ぶのには大きい」「もう少しコンパクトにしてほしい」など判型に関する意見が最も多かった。全体的には容認されつつも、特に内部評価でも指摘された「携帯性」に関しては課題を残した結果となっている。

表紙に関しては、「表紙の桜があまりに綺麗なので、来年が待ち遠しい」というプラス意見がある一方、「表紙の写真が暗い」というマイナス評価もあった。これはほぼ内部評価とも一致する。また、表題の標語として「躍動とふれあいのまち」と書かれているが、この文章に対して「〈躍動とふれあいのまち〉とは思えない」という意見があった。この標語は、平成13年度にまとめられた山科区基本計画(山科区フロンティア計画)で謳われたものであり、行政として今後山科が「躍動」と「ふれあい」のある街となるよう祈念してつくられ、表紙にも記載することとなった。しかし、その掲載意図が利用者に十分伝わっていないかった、あるいは標語と生活イメージとが具体的に結びつきにくい感覚を呼び起こした結果であると考えられ、標語の取り扱いに関しては慎重な対応が必要であったと同時に、標語そのものの理解を住民にどう理解してもらうのかという、別の課題がこの意見から読みとることができよう。

紙質に関しては、「紙質は良い」という意見が1件であったのに対して、「広

げる時に破れそうなので、紙質をしっかりと欲しい」といった紙質の変更を求める意見が3件であった。内部評価でも、できれば紙質の変更を希望する意見がいくつか寄せられていることから、紙質選定段階での見本評価、今後の改訂における考え方に反映できることが望ましい。

公共施設等案内地図およびリストに関しては、「公共施設の連絡先がまとまっていて便利」「分厚い電話帳を開かなくても連絡先が分かる」「施設の位置がわかりやすい」「細かいところまでよく調べられている」「知りたかったことが全て載っている」など、網羅性・詳細性・理解度を評価する意見が大多数を占めた。また、「バス路線も掲載して欲しかった」という回答が3件あり、これはリンク先情報のだけでは不十分なのか、あるいはリンク先情報の表記が分かりにくかったのかを今後検討する必要があるだろう。その他、「目的地までの時間がわかると良い」といった空間軸だけでなく時間軸に関する情報提供を希望するユニークな意見も聞かれた。

イラストマップについては、「見ていて楽しい、面白い」「カラーが綺麗でよい」といった「楽しさ」「カラフルさ」を表現する意見が大多数を占め、その他「子どもにも理解しやすいと思う」「名所史跡がわかりやすい」など理解のしやすさを示す意見や、「動植物の絵が良かった」「鳥や樹木など自然への配慮がよい」など、環境への配慮を行った成果を評価する意見などがあつた。また、「情報量が少し多い」という見にくさに関する声がある一方で、「もう少し注釈が欲しい」「観光用のデータが欲しい」など、固有名詞表記に止まらず、さらなる解説情報・利用情報などを求める意見があつた。ただ、総合的に考えてみると、これ以上情報を掲載するとなると「見にくさ」を指摘の意見が増えることとなり、情報整理の難しさを改めて感じることとなった。

テーママップに関しては、「高齢者施設が掲載されているのがありがたい」「子育てに便利である」などのプラス意見がある一方、「高齢者、幼児をもつ家族向けに我々には縁遠い感じ(40-50代男性)」「歴史や文化を中心とするテーマ地図が欲しかった」など、多様なテーマを求める声もあつた。委員会では多くのテーマを全て網羅するのは不可能なことであり、議論の結果、「歴史・文化」に関してはイラストマップへ集約していく方針で整理を行った経緯もあり、予め予想された評価ともいえる。地域振興課では『おこしやす山科』（平成9

年)、『やましなを歩く ― 歴史探訪 ― 』(平成13年)が発行されており、歴史文化面での情報については、これら他の媒体で補うことを想定していた。ただ、そのような関連文献情報を明記していなかったため、リンク先情報以外にも主要関連文献情報等を付すなどの配慮を事前に検討しておく必要が求められよう。

奥付ページについては、「地名の読み方が入っているのが便利」「町名を間違っていて読んでいたのを発見した」など、在住年数の長い方が多いのにもかかわらず、全体の中では地名の読み方に関するプラス評価が大半を占めた。また、山科区の概要の項に関して、「山科区の歴史年表をつけて欲しかった」という意見があった。

その他の意見として、「醍醐地域なども掲載され、制作者の温かみを感じた」「苦心の跡があちこちに見える労作である」「いろいろな人の意見や工夫が入っているような気がした」など、紙面を通じて感じ取られた市民参加手法に対する意見を示す方もいた。また、「知らないところが沢山ありいろいろ教えていただいた」「改めて山科の土地を見ることができ、楽しく感じた」という新たな発見にした意見や、「発見もあり散歩したくなった」「老人ですが山科の範囲ならまだまだ行動できそうです」「長く京都にいても知らないところが多く、活用範囲が多くなった」など、発見から行動へ発展するケースもみられた。さらには、冒頭にも触れたが、「総合学習で使用したい」など学校における地域学習への応用を希望する声も聞かれた。そして、回答者の中には、史跡に関する情報を提供していただく方もおり、それらは貴重な情報源となった。

## ○学生評価 ― 京都橘女子大学の学生による成果評価 ―

### ● 調査方法

アンケートは、区役所で用いた葉書アンケートと同じ内容のものを拡大し、A4上質紙にコピーしたシートを使用した。原則的には1・2回生のゼミ等において担当教官より地図配布時にアンケートも一緒に手渡し、当日および後日学生が記入し、担当教官あるいは直接筆者が回収を行う方法をとった。調査期間としては、区役所にて地図の一般配布が開始された、平成14年4月26日からアンケート配布をスタートし、前期授業の終了する7月31日までに回収したものを有効とした。なお、印象評価欄が未記入のアンケートについては無効とした。



• 調査結果

[回収率]

アンケートの配布は580行い、回収件数が270(有効回答件数265)であった。アンケート総数に対する有効回答件数の割合は約 46% であった。

[男女比]

女子大学であるため、回答者全員が女性である。

[年齢構成]

年齢構成は、20歳未満が260、20歳以上30歳未満が5であり、30歳以上は0となっている。調査対象が1・2回生であるため、大半は18歳か19歳である。これは一般調査の方ではほとんど回答が得られなかった層でもある。

[区内在住・在勤年数]

山科区に在住している人が167で全体の約 63% であり、その内訳として平成14年に転入した人が148、在住1年が9、2年が1、11年が1、13年が1、18年が1、年数未記入者が6となっている。従って、区内在住者の約 95% が3年未満となっている。

一方、通学している人は92であり、全体の約 35% を占めている。その他、未記入が6であった。

[印象評価・自由記述]

地図を見た印象に関して、一般評価と同じく「良い」「まあ良い」「あまり良くない」「悪い」という4段階の評価設定を行った。その結果、「良い」と回答した人が157で全体の約 59% であり、「まあ良い」と回答した101を加えると全体の約 97% となっており、これは一般評価と同じ割合であり、学生評価でも地図が高く評価されていることが伺い知ることができる。ただ、「良い」と回答した割合は一般評価よりも低い傾向が見られた。また、「あまり良くない」と回答した人が6で全体の約 2% となっており、「悪い」という回答は1であった。学生評価でも属性に関わらず平均してプラス評価がなされている。

また、「あまり良くない」と評価をした6件の理由として、「ゴチャゴチャして見にくい」「図書館の場所が分かりにくい」といった情報量の多さ、わかりにくさに関する意見が4件と最大である一方、「もっと詳しく書いて欲しい」「絵入りでわかりやすい」という逆のコメントもあった。その他「大きすぎて

持ち歩きづらい」「広げては歩けない」「色にムラがある」など携帯性や仕上がりに関する意見があった。情報量に関しては、あまり良くないと回答した人の中でも評価が分かれており、また携帯性に関しては内部評価・一般評価でも意見が出ていた内容と同様のものであった。なお、色のムラについては、印刷技術の問題であり、確かにイラストマップではムラのコントラストが強いように思われる。

そして、「悪い」と評価した1件については、自由記述欄に「もっとわかりやすくしてほしい」と記載があるのみであった。これは、先に「見にくいと」評価した情報量の多さを指摘する回答と関連するように考えられるが、それ以上の表記がなく具体的な内容についてはアンケートからは把握ができない。

次に、評価理由および自由記述に関して、上記以外の内容を一般評価と同じく簡単に整理しておきたい。

まず、全体的なプラス評価としては、一般評価同様「見やすい」「わかりやすい」「とても詳しい」といった視認性や企画内容に対する意見が最も多く、その他「ガイドブックに山科の地図が少ないので助かる」「大人も子どもも楽しめる」「区民外の人たちにとっても良い」「字が大きくて良い」「親しみが感じられる」などの回答があった。一方、マイナス評価としても、「地図が開きにくい」「持ち歩くには少し大きい」など内部評価・一般評価同様のコメントが大半を占めた結果となっている。また、具体的に「冊子形式でも良い」との意見もあった。その他、他の評価同様「主なお店が載っていると良い」といった民間施設情報を求める声もやはり多く、「もう少し写真を載せて欲しかった」など実際のイメージを求める意見もあった。

表紙に関しては、「表紙の桜が綺麗」というプラス意見が若干見られると同時に、「表紙が古い感じがする」という写真モチーフの古さを見抜く学生もいた。ただ、それ以外表紙に関するコメントはなく、また紙質に関する意見もみられなかった。

公共施設案内地図およびリストに関しては、「公共施設が細かく書かれていてすごい」「公共施設がジャンル別に掲載しているので見やすい」「色分けしてあってわかりやすい」など施設表記の詳細性・網羅性を評価する意見が最も多く、「地図が詳しくて良い」とする白地図の詳細性をプラス評価する回答が若

干見られた。しかし、一方で「細い道が書いてなくて残念」という意見も1件あった。また、施設案内リストに関しては「電話番号が載っていて役立つ」といった意見がほとんどで、マイナス評価はなかった。

イラストマップについては、「絵があるとわかりやすい」という理解度に関する意見が最も多く、次いで「色づかいが綺麗」「イラストがかわいい」「絵が親しみやすい」「見てるだけで楽しくなる」など表現に関するプラス評価が目立った。その他、「イベントなどが載っていて良い」「観光地だけでなく、地域の動物や植物などについても知ることができた」「方向音痴でもわかるかも知れない」などの回答があった。一方、マイナス評価では「見ていて楽しいが、ゴチャゴチャしている」「社寺にまつわるエピソードを入れて欲しい」など、情報量に関しては一般評価同様意見が分かれた。また、「ピンクで塗られたところは何を意味するのか」という質問も寄せられ、イラストマップ中でピンク色に塗られた山科本願寺跡および中臣遺跡の範囲を理解できないと思われる意見が1件寄せられた。

テーママップに関しては、「交通機関がわかりやすい」「事故多発交差点を載せたことで意識が高まると思う」「バス停が記載されているので便利」「子育て支援や年寄りのための施設なども掲載されていて心配りが感じられた」など、各テーマに関するプラス評価があったと同時に、「個人病院情報がほしかった」「駅の時刻表などもあるといい」「歴史マップもあると良い」など、他の評価同様個別情報や新たなテーママップを求める意見があった。

奥付ページについても、一般評価同様「地名の読み方が入っているのが便利」「大字の読み方に興味を持った」など、地名の読み方に関するプラス評価が大半を占めた。また、山科区の概要の項に関して、「人口など区の情報など内容が豊富」という意見があった。

その他の意見として、これも一般評価とほぼ同様であるが、「制作者の努力が感じられる」といった制作に関するコメントや、「山科にいろんな所があることがわかった」など新たな発見に繋がった内容、さらには「山科に住んでいるのに、他の観光名所ばかり見ていた。さっそく山科を見て回ろうと思った」「醍醐寺にでも行ってみたくなった」「行動範囲が広がる」「これがあると動きやすくなる」など、発見から行動へ発展するケースもみられた。その他、「他

の区もこうしたマップがあれば良い」「イラストマップは配布だけでなく、街中に掲示してあると嬉しい」「大切に使っていきたい」などの声も寄せられた。

#### 4. おわりに

前章で見てきたように、アンケートではプラス評価が一般・学生共に97%という結果となった。また、評価理由や自由記述内容を照らし合わせても、内部評価と外部評価にそれほど大きな差異は見られないことも判明した。このことは、今回の結果を見る限り、市民参加型プロジェクトの成果が高く評価されているという根拠ともなり、また内部意見が外部意見をほぼ代弁しうることを伺い知ることができる。つまり、行政事業を推進するにあたって、市民参加型手法を導入することにより、その成果がより利用者の意向に即す結果を生み出し易くする可能性をもちうるということをおおむね示しているとみてよいと認識できる。もちろん、今後さらなる事例研究の積み重ねが必要であると考えると同時に、ただやみくもに市民参加を唱えればよいと言うものでもなかろう。今回、われわれが行った方法としては、〈行政—大学—市民〉という連携を核とした市民参加手法モデル＝これを「GDSモデル」と仮に呼ぶことにするが＝が1つの結果を示すことになったわけであるが、GDSモデルに限らず、今後多くの行政事業の中で多様な組織モデルが積極的に導入されることが望まれる。そして、その成果をさらに質の高い仕事へと結びつけるためにも、本稿で取り上げたように、個々の成果に対する検証を可能な限り常に行うことによって、新たな地域創造へと結びついていくことを期待したい。そういう意味でわれわれのモデル特性を考えると、大学が第三者の立場となって仲介することにより、企画段階から制作段階、さらには完成後に至るまでの個々の内部評価を常に行い易い環境にあるということが特色の1つであるといっていいたいだろう。これは区役所と大学の立地がかなり近い位置にあるという環境的要因もあろうし、今回は人的要因にもかなり助けられた感がある。

また、一方で、根本的な課題として「地図とはいったい何なのか」「21世紀における新しい地図とは何か」という問いを常に自分自身に投げかけていた。突き詰めていけば人にとって必要な地図というのは100人いれば100人とも異な

るわけであり、共通に使える1枚モノの地図をつくる意味がこの時代にどれだけ意味にあることなのかも考えさせられた。というのも、初期段階における参加者各々のイメージにかなりのズレがあったことを思い出さずにはいられない。本来はそうしたズレをズレのまま表現できる手法があれば一番良いわけである。単に位置機能や空間把握のみの従来型の地図を作成するだけであればそれほど難しいものではないし、市民参画の意味もあまり見えてこない。それらの機能に加え、表紙やイラストのように感覚的に地域を把握するためのイメージ伝達機能、テーママップのような情報選択機能、文化資源や自然資源などを示す地域資源伝達機能、イベントや四季などのような時間把握機能など、求められるものを可能な限り全て詰め込んでしまったとも言えよう。紙媒体としては、機能量や情報量の限界があるわけであり、たとえばコンピュータデータベースやホームページなどのデジタル情報と地図のようなアナログ情報をさらにうまく組み合わせることによって、新しい地図(=情報ナビゲーション)としての可能性も見えてくる。最近ではデジタルナビゲーション技術も急速に進み、自動車だけでなく携帯電話などにも装備される時代である。また「ヤフーマピオン」に代表されるようなネットマップも今ではさほど珍しいものではなく、GIS (Geographic Information System : 地理情報システム) に代表されるように、多様な視覚情報メディアに民間情報と公共情報とをリンクさせて容易に表示・分析することも近い将来一般的になるであろう。たとえば、今回果たし得なかった1つの課題として、「国際性」というテーマがある。つまり、使用されている言語は日本語のみであるため、他の言語を使用する区民には全く使いづらいものとなる。ところが、コンピュータ上で言語切り替えをするだけでスムーズに表示できれば利用の幅もひろがろう。いずれにせよ、このプロジェクトを通じて今後これまでの地図の概念を越えた新しい視覚情報メディアが誕生する予兆を感じた次第である。

最後に、短くも長い「やましなマップづくり委員会」を暖かくそして時には厳しく支えていただいた委員の方々、区長をはじめとする山科区職員の方々、イラストを描いてくれたデザイナーや印刷関係の方々、アンケートにご回答いただいたの方々、そして関係された大学教職員の方々に対して、この場をかりて厚く感謝の意を表したい。

## 参考資料

京都市山科区民部地域振興課編集発行『やましなマップづくり委員会議事録』2002

NTT メディアスコープ編集発行『タウンガイド京都市山科区版』2002

新生社発行「京都市山科区詳細図」2002

京都市山科区民部発行『山科フロンティア計画』2001

山科区誕生25周年記念事業委員会編集発行『やましなを歩く ― 歴史探訪 ― 』2001

京都市建設局編集、京都市発行『区民の誇りの木 ― 山科区 ― 』2001

京都市文化市民局市民生活部市民総合相談課編集発行『暮らしにやくだつ市民生活の手びき ― 山科区 ― 』1999

おこしやす山科編集委員会編集発行『おこしやす山科』1997

京都橘女子大学編集、淡交社発行『洛東探訪 ― 山科の歴史と文化』1992

その他各種の行政地図